

基盤のグレーに清新の気

「早川俊二展 part I」

『幼い頃ぼくは、米を
いる母に尋ねた。そんな
にいつも同じことばかり
研ぎながら鼻歌を唄って

してどこが面白いの？
母は笑いながら言った。
やっっていることは同じこ
とに違いないが、米を研

ぐ感じは同じではない。
水の冷たさで気持ちがい
き締まるときもあれば、
鳥の鳴き声で調子がつく
こともある。(中略)ど
ちらにしても私はこの米
研ぎの繰り返しの中で生

きなければならないから
ね』
やや長い引用になった
が、これは画家の李禹煥
の文章の一部である。美
しく含蓄に富む見事な言
説だと思う。それで何が
言いたいのかといえば、
画家という人たちも毎
日、絵筆を振るっている
が、「どこが面白いの？」
と聞いてみたくなる時が
ある。同じようなことの
繰り返しの中に何がある
のか。

すると作品のたたずまい
は変わっていないように
見える。しかし、じっと
絵と向き合っているうち
に、これまでとは違った
清新の気を感じた。この
画家も毎日、絵の具を練
り、ナイフで画面に塗り
込み、削るということを
繰り返しているに違いな
い。その明け暮れの中に
言い知れぬ創作の歓喜、
妙味が潜む。村上華岳の
言う「密室の祈り」のよ
うな厳肅なものが。

年、他のメーカーのもの
に変えてみたら俄然、透
明感のあるグレーが得ら
れたのだという。「私の
作品の基盤となっていて
色はグレー。思い通りの
グレーがようやく出せる
ようになった」と画家は
屈託がない。

「早川俊二展 part I」は、東京・神田
錦町のアスクエア神田ギ
ャラリーで八日まで。人
物画の大作六点の展示。
「part II」は静物
画二十六点を十四日から
五月二日まで展示する。
(編集委員 竹田博志)



早川俊二「まどろむ Amely-2」
①と「同一-1」(ともに2008年)



洋画家、早川俊二が三
十二点の新作とともにパ
リから帰ってきた。一見

聞くと、それまで二十
年間も使っていたシンク
・ホワイトの絵の具を昨

年、他のメーカーのもの
に変えてみたら俄然、透
明感のあるグレーが得ら
れたのだという。「私の
作品の基盤となっていて
色はグレー。思い通りの
グレーがようやく出せる
ようになった」と画家は
屈託がない。

基盤のグレーに清新の気

「早川俊二展 Part I」

『幼い頃ぼくは、米を研ぎながら鼻歌を唄っている母に尋ねた。そんなにいつも同じことばかりしてどこが面白いの？母は笑いながら言った。やっていることは同じことに違いないが、米を研ぐ感じは同じではない。水の冷たさで気持ち引き締まるときもあれば、鳥の鳴き声で調子がつくこともある。(中略)どちらにしても私はこの米研ぎの繰り返しの中で生きなければならないからね』

やや長い引用になったが、これは画家の李禹煥の文章の一部である。美しく含蓄に富む見事な言説だと思う。それで何が言いたいのかといえば、画家という人たちも毎日、絵筆を振るっているが、「どこが面白いの？」と聞いてみなくなる時がある。同じようなことの繰り返しの中に何かあるのか。

洋画家、早川俊二が三十二点の新作とともにパリから帰ってきた。一見すると作品のたたずまいは変わっていないように見える。しかし、じっと絵と向き合っているうちに、これまでとは違った清新の気を感じた。この画家も毎日、絵の具を練り、ナイフで画面に塗り込み、削るということを繰り返しているに違いない。その明け暮れの中に言い知れぬ創作の歓喜、妙味が潜む。村上華岳の言う「密室の祈り」のような厳粛なものが。

聞くと、それまで二十年間も使っていたジंक・ホワイトの絵の具を昨年、他のメーカーのものに変えてみたら俄然、透明感のあるグレーが得られたのだという。「私の作品の基盤になっている色はグレー。思い通りのグレーがようやく出せるようになった」と画家は屈託がない。

「早川俊二展 Part I」は、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで八日まで。人物画の大作六点の展示。

「Part II」は静物画二十六点を十四日から五月二日まで展示する。

(編集委員 竹田博志)

日本経済新聞 2009年(平成21年)4月3日(金曜日)掲載